

[ブーケ]

bouquet





— SDGs 特集 —

Think Globally, Act Locally

Vol. 2

デザインで社会を変える

井上 滋樹

芸術工学博士 / アートディレクター
九州大学大学院芸術工学研究院 教授、SDGsデザイン
ユニット長、未来デザイン学センター SI部門長

聞き手：佐野 靖 (東京藝術大学 教授)

“Think Globally, Act Locally”——地球規模で物事を考え、身近なところから行動を起こす——。

よりよい未来をつくっていくために、私たち一人一人にできることは何か？

この特集では、さまざまな分野の方にお話を伺いながら、そのヒントを探ります。

第2回は、九州大学SDGsデザインユニット長として学生たちとともに活動を展開されている

井上滋樹先生にご登場いただきました。聞き手は、東京藝術大学教授の佐野靖先生です。



Profile | 井上 滋樹 (いのうえ・しげき)

九州大学大学院芸術工学府にて博士号取得。マサチューセッツ工科大学 (MIT) 客員研究員、IHCD特別研究員 (フェロー)、慶應義塾大学講師、博報堂ユニバーサルデザイン所長、東京大学先端科学技術研究センター交流研究員、博報堂ダイバーシティデザイン所長を経て現職。障がい者や高齢者、途上国の貧困層向けの研究調査や商品開発、SDGsへの取り組みなど、“人間中心”をキーワードとした研究と制作に従事。著書に『ユニバーサル』を創る！ソーシャル・インクルージョンへ (岩波書店)、『いい考えがやってくる！』 (日本経済新聞出版社) などがある。



聞き手 / Profile

佐野 靖
(さの・やすし)

東京藝術大学教授 (音楽教育)。『唱歌・童謡の力：歌うこと＝生きること』『文化としての日本のうた』などを刊行。文化庁プロジェクト「アートによる復興支援」などで学校・地域・大学が協働するアウトリーチのプロジェクトに取り組んでいる。現在、東京藝術大学学長特命・社会連携センター長。

デザイン × SDGs

佐野：私自身、所属する大学の社会連携センター長を務めていることもあり、教育活動をSDGsと関連付けることができるのではないかと日々考えています。まずは井上先生が提唱されている“Design for SDGs”について、具体的な取り組みをご紹介いただけますか？

井上：SDGsというのは人類共通の課題ですが、僕の専門はデザインなので、「デザインで何ができるのか」を

問い掛けながら活動しています。例えば、インドの貧困層向けの研究調査や商品開発を10年ほど行っているのですが、さまざまな課題をデザインで解決することがテーマです。

佐野：学生を巻き込んだ活動もされていると伺いました。

井上：2018～19年には学生と企業の連携プロジェクトとして、「九大×花王 SDGsクリエイティブコラボ」を開催しました。デザインを専門にしている大学院生たちと一緒にインドのスラム街を歩き、衛生観念の啓発

や衛生環境の改善を目的とした子ども向けの絵本『The Great Indian Cleaning Mission!』(英語版・ヒンディ語版・マラティ語版の3種類)を制作するというプロジェクトです。「きれい」をテーマに、ゴミのポイ捨てをしないよう働き掛けるストーリーを考え、絵本にして子どもたちに読み聞かせをしました。この絵本は現地でも好評で、児童約1,000人に寄贈することができました。

佐野：絵本を制作した学生たちの感想はいかがでしたか？

井上：学生たちは絵本が完成するまでたいへん苦労していましたが、プロジェクト終了後に「僕たちにもできることがあった」という言葉が出てきたのが印象に残っています。現地に飛び込んで行って、体当たりで子どもたちと触れ合うのは、学生だからこそできることもありません。

佐野：学生たちを現地に連れて行くようになったきっかけはあるのですか？

井上：僕は20歳のとき初めてインドへ行き、1か月ほど放浪しながら、路上で亡くなる人や飢えに苦しむ人を見てしまったんです。それが原点となり、とにかく現実を見て、「この人たちの困っていることは何か」という課題を発見し、それをどう解決するかという教育プログラムを立てました。リアリティを見て初めて、課題解決方法が分かるんです。

佐野：井上先生ご自身の体験が原点となっているんですね。

井上：九州大学では他にもさまざまな国際プロジェクトを展開していて、南アフリカの貧困問題を農業で解決するプログラムや、インドネシアで脱プラスチックア

分野を超えた連携を

佐野：井上先生のお考えになるSDGsとはどのようなことでしょうか？

井上：SDGsというのは「当たり前」を根本から見直していくことだと思います。僕らが日常生活を送っていくうえで、エネルギーを使ったり、ゴミを捨てたりしていますが、「それって本当にいいの？ どうしたらいいの？」と問い掛けていくと、実はいろいろな分野からのアプローチによって改善できるはずなんです。

佐野：コ・クリエーション (Co-Creation / 共創) という言葉もありますが、分野や立場を超えてアイデアを出し合うことで解決策が出てくることがありますよね。

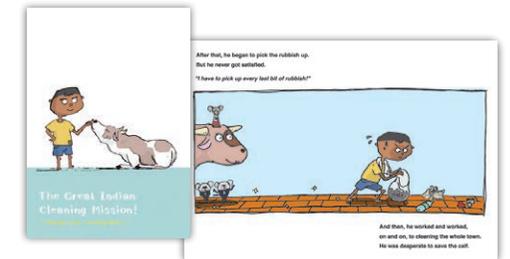
の茶碗を作る活動、ドイツの大学と連携した災害時に役立つプロダクトの開発など、国を超えて学生たちが活躍しています。



「九大×花王 SDGsクリエイティブコラボ」で井上先生と学生たちが訪れたインド・ムンバイ



子どもたちに絵本の読み聞かせをする学生



現地の子どもたちに贈った絵本。インドの生活環境を踏まえて制作したもので、ゴミ問題を楽しく学べる

井上：2018年に九州大学でSDGsデザインユニットを立ち上げたのですが、メンバーの中にはデザインの専門家をはじめ、哲学者、文化人類学者、アーティスト、彫刻家も入っています。教員であると同時にクリエイターでもある彼らと連携しながら、SDGsに関するさまざまな取り組みを行っています。それも大学の組織だけに収まるのではなく、国内の他大学や海外の大学、自治体や国際機関と一緒に進めていくことを目指しています。

佐野：国内外の学生を対象とした事例をご紹介いただけますか？

井上：2019年から、本SDGsデザインユニットの主催で“SDGsデザインインターナショナルアワード”という取り組みを始めました。「デザインで社会を変える」ことをテーマに、九州大学に留まらずデザインに関心の

ある国内外の学生が応募できます。例えば、「セーフティネット」という魚の網。魚を捕獲する網にLEDライトで囲われた穴を取り付けることにより、魚の年齢や種目を選別することができ、乱獲を防ぐ仕組みになっています。デザインを生態系の保全に役立てるといふもので、これも学生のアイデアでした。

佐野：学生たちの自由な発想がよりよい未来につながっていくように感じます。↗



アメリカの国際NGO (Institute for Human Centered Design) での研究活動

井上：2021年で3回目になりますが、今回はアジアの市町村と連携しながらデザインで何が解決できるのかを探っていく予定です。コロナ禍になる前に、10か国、14の大学のデザイン学部を訪ね、国際連携を呼び掛けてきました。どの大学の先生も共鳴してくださり、デザインの可能性を再確認できたので、「デザインで社会問題を解決する人材を育成したい」というメッセージを九州大学から発信しながら、世界の学生の背中を押すことができたと考えています。



九州大学大学院で実施したデザインワークショップの様子

SDGsの視点から考える音楽教育

佐野：音楽の場合は演奏という再現芸術が中心となるので、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンなどの作品を繰り返し演奏し、聴きながら育ってきたアーティストが多いんです。そのためSDGsといった新しい取り組みには少し距離を感じることもあるかもしれません。井上先生のSDGsデザインユニットには音楽の専門家はいらっしゃいますか？

井上：音楽の先生はいないのですが、僕自身は音楽が大好きで、姉もクラシックのハープ奏者です。実はSDGsの17の目標に「アート」という項目はありません。でも、芸術ができることはたくさんあると思います。先日、シンガー・ソングライターの橋本昌彦さんと一緒に、福岡県糸島市の海岸でSDGsに関する対談と命の大切さを歌ったコンサートを開催しました。「思いやり」や「愛」といったことを普通の人はなかなか言葉にできないのですが、アーティストはそれを詩にして歌ってしまえるんですね。本当のことを言えて、人の心を変えていく、直接訴えていく力があるように感じます。

佐野：デザインのように具体的な形にならなくても、音楽は「人と人をつなぐ」ことができます。先ほど井上先生が、SDGsにおいても人材育成が重要だとおっしゃっていたので、そういうところに音楽教育が入っていくこともできると感じました。自分たちが今まで

やってきたことをSDGsの観点から振り返ってみることが大事なかもしれません。子どもや若い人たちが、芸術を通して感性を伸ばしたり継続する力を身に付けたりするために、音楽教育にどのようなことを期待しますか？

井上：僕が中学1年生のときに、音楽の先生がビートルズの『Let It Be』のレコードを授業中にかけてくれたんです。美しいメロディーに大きく心を揺さぶられ、すぐにレコード店にいき、生まれて初めてレコードを買いました。そのレコードは今でも大切に持っています。歌詞からは、苦しいときに愛が人を守ってくれるというメッセージを感じました。また、日本の童謡には美しい自然や動物たちの営みも描かれているので、そうした歌詞をSDGsの視点から捉えて、「昔はいっぱい花があったけれど最近は見かけなくなったよね。どうしてだろう？」と問い掛けて、生態系の保全の話をすることもできる。それをきっかけに「学校に花を植えてみよう」といった活動にもつながりますよね。

佐野：楽譜や音楽に込められたものは、全てが可視化されているわけではありません。ですが大人は子どもたちと一緒に、可視化されていないものや背景についても大切に考えていくことが必要だと思います。

井上：音楽を通して人を育てていくというのは、人の心を育てていくこと。幼稚園から大人まで共通するもので、とても大きな役割をもつと思います。

佐野：教える側と教えられる側と一緒に考え、ともに学び合うことが大切ですね。そして、皆が共感できることを少しでも見える形にできるようにがんばりたいと思います。特に音楽家は、いま自分たちが実践していることの中にSDGsにつながるものがあるということに気付いていない場合も多いでしょう。これを機会に

自分の生き方やライフスタイルを見直して、皆が意識をもてば大きなうねりになると感じました。

井上：さらにジャンルを超えて、音楽とデザインで手を取り合ってコラボができれば、とてもおもしろいと思います。



衛生環境研究のために訪れたインドネシアの小さな島の小学校で、子どもたちと

未来を担う子どもたちへ

佐野：これからの未来を生きていく子どもたちへ、「こんなことにチャレンジしてみよう」といったメッセージがあればお聞かせください。

井上：今は時代の転換期だと感じていて、「子どもたちにとって何が幸せなんだろう？」と考えることがあります。僕の時代はレールが敷かれていて、有名大学に進学して、卒業後は官僚になったり有名企業に就職したりすることがよいとされていました。でもそういう生き方ってどうなの？とSDGsをきっかけに考えてみてほしいんです。昨年のユニセフ報告書によると、日本の子どもの精神的幸福度は38か国中37位だったそうです。こんなに先進国なのに、幸せを感じていないのかな、と……。もっと、自分がなりたい自分になればいいと思うんです。自分が幸せになるとはどういうことなのかを考えて人生を歩んでいけるとよいですね。

佐野：そうですね。組織に属さなくても1人でいろいろなことができる時代になってきたと感じます。次世

代の課題を解決できる人材を育てていくために、学校でどういったことを取り入れていくのがよいとお考えですか？

井上：やはり現場に行くことがいちばんだと思います。近くの池に行ってどんな魚が泳いでいるのかを観察したり、高齢者施設に行って高齢者に何が必要とされているのかを考えてみたり……。全ては現場に足を運ぶところから始まるのではないのでしょうか。積極的に外へ出て行って刺激を受けてほしいです。

佐野：井上先生ご自身も、小・中学生をはじめとした若い世代へ向けてSDGsに関連したワークショップを行っていらっしゃると伺いましたが、大切にしていることや留意していることはありますか？

井上：先ほど申し上げたように、SDGsは今の暮らしを根本的に見直す機会だと思っているので、「僕らの生活はどう成り立っているのだろうか？」と考えるワークショップを開いてみると、実際の生活から課題が見えてきます。例えばコンビニへ行って弁当を買おうと、使い捨ての箸やスプーンも付いてくる。最近レジ袋は

有料になりましたが。僕は毎日ゴミを捨てたり、二酸化炭素を排出したりしているけれど、このままの生活を続けていくと、2050年には地球が3つ必要だと言われています。SDGsは国連が掲げた目標ですが、それほど崇高なものではなく、自分たちのライフスタイルをどのように変えていくかということなんです。

佐野: SDGsという言葉だけが独り歩きしているようなところもありますが、身近な暮らしを考えるきっかけとして捉えたらよいですね。

井上: 極端な例だと、冷房を使わないとか車に乗らないといった発想になりますが、我慢はしないこと。最近、僕の周りでは自転車通勤する人が増えていますが、環境に優しいうえに自分の筋肉も増える。あまりストイックにならないで楽しく続けられることがポイントです。SDGsは「サステナブル (持続可能)」という言葉がキーワードなので、経済と社会のバランスを考える必要があります。企業ももうけていいんです。利益が出ないと持続可能にならないし、環境問題にも取り組めませんから。利益を出しながら社会にも環境にも配慮していくことが大切です。

佐野: そういった視点を教育にも取り入れることが必

要ですね。学校のカリキュラムにはすでに「総合的な学習の時間」が設けられていますから、SDGsのいろいろな目標をテーマにして、子どもたちからの発想をそれらに結び付けていくような展開も考えられます。

井上: まずは身近なところで、海に行つてゴミを拾うことや、虫を採りに行って自然のすばらしさを実感することでもよいでしょう。世界の飢餓や貧困はもちろん解決しなければいけません。"Think Globally, Act Locally"という言葉にもあるように、自分の身の回りにある課題を見つけて、何ができるのかを考えてみるところがスタートだと思います。



インドネシアの食料問題に関わる、椰子の実の生産者への取材

SDGs とは？

Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)

2030年までに貧困や飢餓、福祉、教育、ジェンダー、エネルギー、気候変動、平和的社会等の課題に対して解決策を見だし、持続可能でよりよい世界を目指すための国際目標です。国連サミットで決められた17のゴール・169のターゲットで構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



上野耕平の CROSSING [クロッシング]

第10回

車体を傾けて駆ける最後の国鉄型特急列車 やくも



岡山駅と出雲市駅を結ぶ特急「やくも」。山陽本線、伯備線、山陰本線を走ります。特に伯備線区間は中国山地の険しい山間を走ります。そのためかつての列車では、カーブが多く速度を落とすとして走行しなくてはならず、どうしても所要時間がかかってしまっていました。

それを解決するために編み出された振り子式という技術を採用する381系。カーブを走る際に車体を内側へ傾け遠心力に打ち勝ちスピードが上がりました。この技術の走りである381系も数年後には引退する見込み。国鉄型特急車両としては最後の列車です。出雲市行き先頭には眺めのよいパノラマ車も連結されており、山間の険しさと車窓の美しさを堪能できます！

文・写真：上野耕平 (うえの・こうへい)

第28回日本管打楽器コンクール サクソフォーン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

◇CD『アドルフに告ぐII』(日本コロムビア) [3,300円(税抜価格3,000円)/COCQ-85478] が好評発売中。(収録曲) 藤倉大『ブエノウエノ』*、逢坂裕『ソプラノサクソフォンとピアノのためのソナタ エクスタシス』、デュリュック『ソナタ嬰ハ調』、マルタン『バラード』、トマジ『バラード』(演奏) 上野耕平 (サクソフォーン)、山中惇史 (ピアノ)、林英哲 (太鼓奏者)*

編集部メモ

1972年3月に山陽新幹線の新大阪～岡山間が開業した際に誕生した、伯備線経由で岡山と山陰地方を結ぶ特急。基本的には4両編成で、岡山駅～出雲市駅間(山陽本線、伯備線、山陰本線)を運行線区とし、カーブでも高速で走れる振り子式の車両で運転している。



One day, ワンデー ワンモーメント one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会(JPS)、日本舞台写真家協会(JSPS)会員。米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォトを中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。
<https://hidaki.weebly.com> Instagram:tomokohidaki_2

12枚目

かがやく波紋

京都に来ると必ず、自転車に乗り、知らないお寺に行く。地図とカメラバッグと財布だけ持って、この日は洛北の蓮華寺へ。どこか懐かしい、優しい風情の入口をくぐり廊下に出れば、フレイム越しの絵画のように美しい庭が広がる。緑のもみじの葉がサワサワと揺れて、その下のエメラルド色の水面を小一時間、眺めていた。

時折水面に、ちいさな波紋が音もなく広がる。何度も何度も広がる

波紋は、枝からの水滴か、それとも湧き水だろうか。気のせいかと思う程の水音が聞こえて、ほんの一瞬、きらきらと透き通る魚が顔を出す。壮大な自然と同じくらい、この輝く小さな横顔に、驚きと元気をもらえるのは何故だろう。京都の寺で思うことは様々だが、この波紋の主の透き通った輝きに、何か背中を押されたような気がした。





吉原敦子 (よしはら・あつこ)
元 入間地区音楽教育研究会 会長
日高市立教育センター 教育相談室長

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第9回は、現在埼玉県の日高市立教育センター教育相談室長を務める吉原敦子先生が、卒業式で話した式辞です。令和2年度のコロナ禍の中、日高市立高根小学校校長として、地域の方々への感謝とともに、子どもたちの背中を優しく押すメッセージを伝えました。

また、今号では吉原先生の教育に対する思いについても伺いました。

第9回 吉原敦子 先生 (日高市立高根小学校 校長)

今を生きる

高根小学校では「新しい自分発見 そして、動く」をテーマとして、子どもたちの自己肯定感を育ててきました。大切なのは「自分を知ること」と「相手の立場に立って考えること」です。

例えば友達の靴を履いてみて、その履き心地から自分との違いを肌で実感することで

「違いを受け入れる」練習をしました。また、子どもたちにはいつも「失敗してもいいよ。失敗したからこそ分かることがある」「教室は、間違ってもいいところだよ」と伝えてきました。

子ども一人一人には、その子にしかない特性、個性があります。

五感を磨き、感性や閃きを引き出せることが、集団・学校生活のよさでもあります。

学校は、たくさんの方々のお借りして生きています。日高市に住む人々は温かく、

ここはとても優しい町です。高根小学校では令和2年度も、卒業生や教育関係、

多くの学生ボランティアの皆さんが、学校行事にご協力くださいました。

令和2年度高根小学校式辞

「鹿山の尾根に木々の芽萌えて、日高の春は見渡す限り」まさに本日を祝うような校歌です。保護者の皆様、お子様のご卒業を心よりお祝い申し上げます。12年間育ててこられたお子様を、ここまで育てあげるのにどんなにご苦労とご努力があったかは、計り知れません。高根小学校一同、この日を迎えることができ、この瞬間を共にできることに感謝いたします。そして、学校へのご理解ご協力をいただき、誠に有り難うございました。

6年生の皆さん。ご卒業おめでとうございませう。いよいよ最後です。皆さんに^{はなむけ}饞の言葉を贈ります。

今を生きる
共に生きる
そして、人を愛する

この言葉は、6年生に「生きる」というテーマから選ばれた言葉です。また、詩の応募作品から加藤さくらさんと林あやかさんが選ばれました。その一点、林あやかさんの詩を読みます。



高根小学校の全校児童226人と先生方

生きたとは感謝すること
生きたとはみんなで楽しむこと
生きたとは悩むこと
生きたとは、困難を乗り越えること
そうやってみんな生きていく
一人じゃない みんながいる
そうやってみんな大人になっていく
これからもずっと

今、この一瞬にも何かが動いています。過ぎ去るこの時間を感じることは、なかなか難しいことです。自分をもう一人の自分で俯瞰し、自分に聞いてください。「おいおい自分、これでいいですか」と聞いて考えてください。それが大人になるということです。

そして、周りを見回してください。見て、聞いて、匂いを嗅いで、五感を働かせ、今起こっている状況を感じてください。皆さんの感じ方は違います。だからこそ、仲間を支えて、助けることができるのです。「共に生きる」とは、困った時こそ、悩んだ時こそ、悲しい時こそ、「支える力を出し合える」ことだと思えます。

さて、新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発令、そして臨時休校から始まった4月でした。分散登校が遠い前のことに思えるのは、その後、駆け抜けるようにたくさんの新しいことがあったからかと思えます。日光の修学旅行も感染症対策を万全にしたものの、本当にうまくいくのか不安がよぎりました。一人でも感染者を出したら、終わりであると責任を感じました。覚悟を決めて挙行了した日光は、神様がついてくれているかのように、太陽が現れ、^{けいふのたま}華厳滝の水の音と景観に包み込まれたあの瞬間は忘れられません。一人一人が、楽しい思い出ができるようにと、真剣に事を進めていました。本当に行けてよかった。全員で行けてよかった。奇跡は偶然ではなく、ここにいる全ての6年生が、「共に助け合えたから」です。この時から、6年生が最高学年として、一回り大きく、そして強くなっていくことを感じました。

実は、本日この後公開される校歌の撮影は、高根小学校を卒業した大学生10名が協力していただき、編集された作品です。歌えない卒業式に、困った私たちを助けてくださいました。大学生の皆さんが、「お世話になった高根小です。高根小学校が大好きだから、できることはやります」とおっしゃってくださいました。本当に感激でした。本日もこの本番のために、待機してございませう。心より感謝いたします。

また、中庭の石がある壁に、壁画を描きました。力強い10名の壁画チームで、描き続けました。PTA副会長の平井様、吉田様、そして、おじいさまにも協力いただきましたことに感謝申し上げます。ハートの中に書かれている言葉は、各自の6年生の今思う大切な言葉を刻みました。8年後、皆さんが20歳の成人式には、どんな考えになっているのでしょうか。どうぞ、高根小でこの壁画が生き続けますように。



6年生の子どもたちが大切にしている言葉を刻んだ壁画

ところで、2週間ほど前、6年生とキャリア教育の勉強をしました。ここにいる10歳年上の先輩に来ていただきました。テーマは「自分を知る」で行いました。先輩4人の話は深く、それぞれが乗り越えてきた道のりを感じました。人生100年時代、生まれてから20歳までは、「生き方の基礎を身につけていく時間」そして、20歳から60歳は、「その基礎を活かして、生きていく第一期」、60歳から100歳が第二期で「人生の本番」と言われているそうです。

はじめに「自分を知る」ために「友達の良いところ」を伝え合いました。実に嬉しそうでした。6年間一緒にいたからこそ、49人のお互いの長所も短所も知っていますね。そして、あらためてこの時間に、成長を認め合いました。めあての一つに「自分を決めつけたい」とありました。「今の自分はこうである」と決めると安心します。何者かわからないと不安です。また、相手のことを決めて動くと言ったと話を柱ができるような気がします。決めてかかるのではなく、相手を想像して話したり、聞いたりできるようにすると、新しい相手の考えが見えてきて、自分も受け入れられていくようになります。

実は、私もそれができなかったのです。高校生の時に、音楽を勉強していた私は、歌う人の伴奏をさせていただく機会がありました。そのレッスンに行った時に、先生は「あなたの演奏は、歌う人の気持ちを考えていない、決めつけて弾いている。あなたは、歌の伴奏ではなく、独奏をしている」とおっしゃいました。独奏とは「一人で演奏すること」です。一生懸命練習していった私は、落ち込みました。しかし、その後その言葉で、自分の音楽に対する考えが少しずつではありますが、変化していったことを感じました。歌の人の気持ちに寄り添い、想像すること、そして、歌詞の意味を表現することを学んでいきました。

この考え方は、音楽だけでなく、相手の立場を考え、どう動いていけばよいかの見通しをもち、動くことのきっかけとなりました。学校はこうして、多く経験を積み、失敗してもまた挑戦できる場所です。だからこそ、新しい自分が見えてくるのです。

最後に、4年生の時に歌った『いのちの歌』の歌詞に、「本当にだいじなものは 隠れて見えない ささやかすぎる 日々の中に かけがえない喜びがある」とあります。12年間生きてきた、あなたの本当に大切なものは、何ですか。隠れて見えないものを失わないように、毎日を丁寧に一生懸命生きていってください。いつか、それはあなたの誇り「プライド」となります。

さあ、次のステージにいきましょう。新しい門出です。自分で、自分の人生の扉を開けるのです。そして、自分の種を蒔きなさい。大丈夫、自分で開けられる力をつけました。

家族の方をはじめ、たくさんの方々への「感謝」を心に、これから出会う方との「出会い」を大切に、「今の運命に乗って」生きていってください。

ここには参加することができなかった在校生の皆さん、お世話になった卒業生とお別れです。この6年生から教えていただいたことを心の宝箱に入れてください。そして、みんなで力を合わせ「みんなが育てた高根プライド」をまた大事に育てていきましょう。

結びに、ここにおいでになれなかったご来賓の皆様、保護者様、そして、学校応援団をはじめ地域の皆様のご健勝をお祈りすると共に、本日巣立っていく49名の卒業生に対し、これからも温かく見守っていただくことをお願い申し上げます。



卒業式でピアノを弾く吉原先生。子どもたちが大好きだという校歌と、入退場時の『田園』と『喜びの歌』、卒業証書授与では、教諭2名で思い出の音楽会等の曲を演奏しました

(令和3年3月24日、日高市立高根小学校卒業式 式辞)

Interview

吉原敦子先生 音楽を通して人を育てる

—コロナ禍の中、学校として独自に取り組まれたことはありますか？

新型コロナウイルスを正しく恐れながら「開かれた学校」を運営する必要性を強く感じました。当たり前のことができないのは非常にもどかしいことです。給食のときもおしゃべりできず、とてもかわいそうで。このような状況下で「共感」「共有から生まれる感動の喜び」を育てるために、2つのことを実施しました。

1つ目はテレビ放送です。朝会や集会を全てテレビ放送に替えました。すると先生も子どもたちも、テレビでどう伝えと分かりやすくなるのか試行錯誤し、その結果、みんなのプレゼン力が育ちました。

2つ目は給食の時間に、毎日中庭の池の前で子どもたちが1人でマイクを持って校歌が『ふじ山』を歌う機会をつくりました。歌いたい子は「なぜその歌を歌いたいのか」「その歌で何を伝えたいのか」を書いて、エントリーする方式です。最初に来たのは1年生で、心からの歌を歌い上げました。直前に膝が震える子もいましたが「エントリーは自分で決めたよね。だから最後まで自分で歌ってみようか」と背中を押しました。最終日までに、合計50人もの子どもたちが歌っています。近隣の地域の応援もあり、12時50分が楽しみですよというお声もいただきました。子どもたちにとって、かけがえのない経験になったことだと感じています。

—学校での勤務を終えられた今、どのような思いをおもちでしょうか？

今の私があるのは、日高市の方々によって育てていただいたおかげです。

教育長様をはじめ、教育委員会、地域の方々、そして何より子どもたちに教えてもらったことが多々ありました。感謝の気持ちをこれからも教育を通してお返ししたいと考えています。

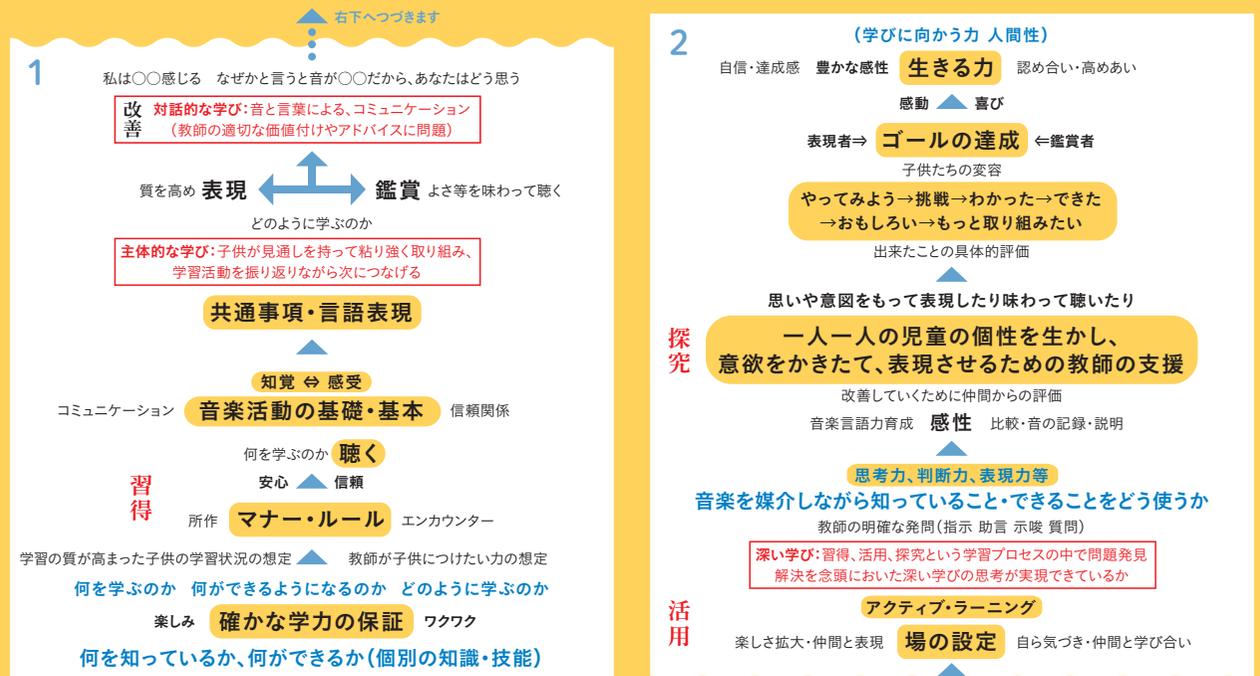
教育相談室には、悩んでいる保護者の方や子どもたちが訪れます。私はまず、「もう一度自分と向き合ってみましょう」と伝えながらお話をしています。そうすれば、光が見え始めます。

私たちの体の中には、数億年前から伝わってきた細胞が生きています。コロナ禍を生きる運命を受け入れて、この時代を生き抜くために、世界と共に音楽文化を守り、未来の子どもたちの「イノベーション（改革する力）」を育てていきたいと思っています。

音楽／感動は心のとびらを開く

「教師は子どもをよく学ばせるための学習指導過程のアレンジャー」として、子どもがよく学ぶための人間カウンセラー」

自分は、どのように社会、世界と関わるのか、そして、どのようにより良い人生を送るのか 夢の実現



Contents

- 04 [連載] SDGs特集 Think Globally, Act Locally Vol.2 井上滋樹(九州大学大学院芸術工学研究院 教授)
- 09 [連載] crossing 第10回 上野耕平
- 10 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 12枚目 ヒダキトモコ
- 12 [連載] 次代につなぐ 校長先生の講話 第9回 吉原敦子

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.12をご清覧いただき、ありがとうございます。
前号からスタートした「SDGs特集 Think Globally, Act Locally」のVol.2では、デザイナーの観点から、国内外で社会に向けた活動を続ける井上滋樹先生にインタビューを行いました。SDGsの重要性が問われる今、井上先生はジャンルを超えて手を取り合い、教育活動や社会連携などでSDGsの達成を試みています。「次代につなぐ 校長先生の講話」では、埼玉県の日高市立高根小学校の校長を務められた吉原敦子先生が、コロナ禍の卒業式で読んだ式辞をご紹介します。子どもたちに贈られたメッセージは、過去のご自身の体験をもとにした、強く温かい言葉でつづられています。また吉原先生に直接インタビューを行い、これまでの教員人生や教育に対する思いを語っていただきました。お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 中澤美羽

DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷

製本: ヤマナカ製本

No. 12

<https://www.kyogei.co.jp/>